

新春文芸

日本には豊かな四季があり、土浦にもその四季に応じた情緒溢れる様々な風景があります。今回は市内で活動をする短歌、俳句、川柳の会の方に、土浦の春夏秋冬を題材に、歌と句を詠んでいただきました。新年を迎えたこの機会に、自分のまちの四季の風景に改めて思いを巡らせてみてはいかがでしょう。

短歌 『土浦の春』

白梅にメジロの緑の羽映り土浦城趾に春訪れる
色川 昌志
亀城公園（土浦城趾）に咲く梅の花、一輪ごとに春の歩みを感じさせるものです。訪れるメジロの声も暖かさを運びます。

子ら寄れば岸に相ひ寄り土浦を離れられない残り鴨かな
栗田 幸一
鴨は留鳥の軽鴨以外は、春を待たずに北の地へ帰る。ところが春深くなっても湖沼に居残る鴨を残し鴨といいい、どこか愛らしい。

新春の霞浦の湖岸に羽根休め白鳥鴨のふる里なりや
腰山 佑子
毎日公園に散歩に行く途に此の冬も湖岸に羽根休め寛いでいる白鳥や鴨に癒される。ここをふる里に飛来してくるのか感動する。

湖を周るりんりんロードは花霞ヘルメットが見ゆまた四つ行く
遠山 順子
爛熳の桜花の中を色とりどりのヘルメットの自転車車が走る。三々五々と続く風情はまるで、青春映画の二コマを見ているようです。

銀輪で町起しする土浦のりんりんロードを奔る若きら
渡部 克美
ヘルメットに長袖シャツと短パンで市中を走る若者が増えた。土浦が健康的に若返った気がして嬉しい。



俳句 『土浦の秋』

大花火揺れの止まらぬ城下町
狩谷 諭
数十万の観客を迎え、豪華絢爛たる光りと音の美の競演の夜。十号玉の轟音と観客の歓声で、城下町は揺れ続ける一刻となる。

風いちめん峠明るき蕎麦の花
土屋佐奈江
常陸野に咲く蕎麦の花の美しいこと。夕暮れどき、風に揺れて小さな白い花が光りのさざ波となり、見る者を幸せにしてくれる。

稲を刈る床屋のようなコンバイン
山中 忠雄
昭和初期、土浦の上大津周辺は畑と田圃ばかりであった。今は秋になると、残されている田圃の稲穂の黄金が美しく、懐かしい。

みずうみに来て秋蝶の白さかな
山根 延子
水郷公園の静かな佇まいに癒される。対岸の屋根瓦の煌めきに穏やかな暮らしを思い、何時までもこの風景の続くことを祈る。

激辛のカレーの夕餉冬間近
山本慶吉郎
日ごとに冬の気配の頃合い、心まで温まり勇気を貰う夕餉をと思つ。激辛のカレーを摂り、明日の仕事に備えるのも一興である。



短歌 『土浦の夏』

真鍋なる照井の水に夏さりてほてい葵の咲く日待たるる
市島 紀郎
真鍋宿の善応寺脇にある照井は昔から洩れたことがなく旅人の喉を癒したとか。夏にほてい葵が薄紫の花を咲かせるそつです。

車椅子を一気に乗せてキララちゃん小暑のなかを走り行きたり
根本 晴市
キララちゃんは土浦を走る小型の路線バスである。運転手が車椅子を一気に乗せた、手際の良さに感心。夏の日のことである。

炎天も人の情も廻しつつ小野の水車に山の風吹く
荒井 洋子
懐かしき故郷の小野山に友と登り感動した。四季折々の山の姿、美しさは変わらない。令和の年に水車の音を、平和を祈りつつ聴く。

一世紀余数多の子等を見守りて青葉まぶしき真鍋の桜
生稲真理子
真鍋小学校校庭の真中に天然記念物の桜の古木が立ち並び、春には満開の桜、初夏からは青葉の木陰が大勢の子供たちを育んできました。

霞ヶ浦のゴロハゼが好きという母に佃煮探しし日もはるかなり
平澤 良子
私はゴロハゼを知らなかった。食べたという母のため探して、私も好きになった。最近は見かけないようだ。



川柳 『土浦の冬』

北風がじやれる風車も陽も笑う
後藤 建坊
快晴の霞ヶ浦公園の陽射しは温かく、オランダ風車に吹く北風はじやれるかのように纏いつき、風車も太陽も笑ってしまつ。

初日の出霞浦で無料の願を掛け
富田 こうし
霞ヶ浦の初日の出も素晴らしい。寺社仏閣に行けなくても霞ヶ浦は無料で願いを聞いてくれる広い心を持っている。

先が見えるレンコンを煮る年の暮れ
久保田 莉凡
お節料理に姑が、見通しが利くようにと、レンコンをかかさず用意してくれている。優しい心遣いがうれしい。

イルミネーション二人の距離を近づける
山本千栄子
冬の風物詩になった霞ヶ浦公園のイルミネーション。幻想的な光に包まれた空間は大切な人とずっと見ていたくなります。

寒風に耐えて連根掘る泥田
内野 泰守
冬の寒さの中、胸まで水につかり泥の中を手さぐりでほりだす。大変な重労働であるが、正月には欠かせない食材である。

